

第4章 京都大学本部構内AU27区の発掘調査

千葉 豊 笹川尚紀 長尾 玲

1 調査の概要

本調査区は、京都大学本部構内の東南辺に位置し、吉田本町遺跡の範囲内にある（図版1-404，図97左）。ここに、国際科学イノベーション拠点施設の新営が計画されたため、周辺地点の調査成果を勘案して、発掘調査を実施した。計画区域には、地階をもつ既存の建物が存在しており、この部分についてはすでに遺跡は破壊されていると予想されたため、既存建物の存在していなかった部分に調査区域を限定した。これにより、調査地点は4箇所に分かれることになり、西からA区、B区、C区、D区と呼ぶことにした（図97右）。調査面積は、A区が373㎡、B区が89㎡、C区が160㎡、D区が193㎡で、総計815㎡である。調査は、2013年11月18日に開始し、2014年2月21日に終了した。

本調査区周辺では、南に隣接する75・89地点〔五十川1981〕で、奈良時代の竪穴住居、中世の道路・溝・土坑墓・不定形土坑、近世の道路など、東に隣接する262地点〔伊藤・富井2002〕で、中世の土坑、近世の溝や杭列などが見つかっており、古代以降における土地利用を明らかにすることを主たる目的として調査を進めた。調査の結果、どの調査区もかなりの部分が攪乱を受けていたが、中世の道路・溝・砂取穴、近世の小穴などの遺構を検出するとともに、先史時代から近世にいたる遺物が13箱出土した。

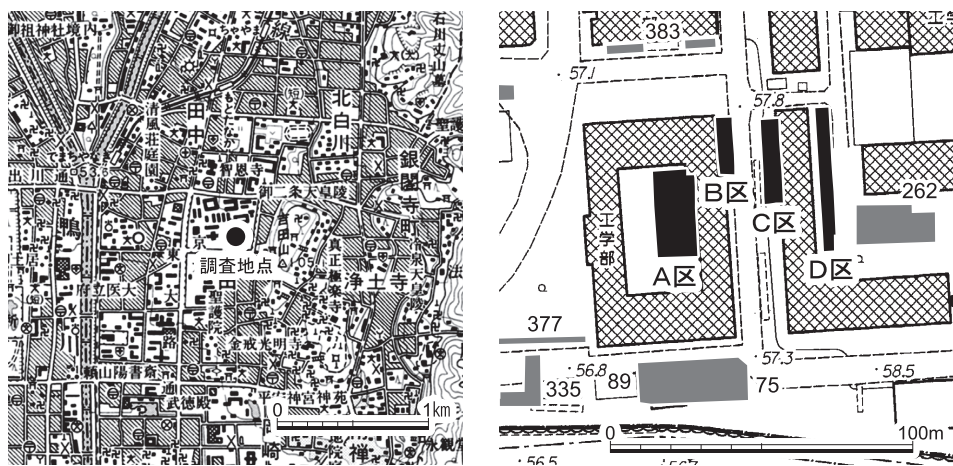


図97 調査地点の位置 縮尺 左：1/5万，右：1/2500

2 層 位

調査地点は4箇所に分かれているが、基本的な層序は共通している。図98に、A区の西壁と東壁、図99にB区東壁とD区東壁の層位を示した。

地表面の標高は、D区北東隅で58.3m、A区南西隅で57.5mをはかり、北東から南西へ向けてゆるやかに傾斜している。第3層上面の標高もD区では57.8m前後、A区では57m前後で、現地表面の傾斜は、旧地形を反映したものとみることができる。

第1層は表土で、大学設置以後の盛土である。第2層の灰褐色土は、D区以外では大学造成時に削平されたものとみられ、残存していなかった。近世の遺物を包含する。第3層は茶褐色土で中世の遺物をわずかに包含する。第4層の黒色土は均質でやや粘質な土壌で、古代～中世の遺物を包含する。

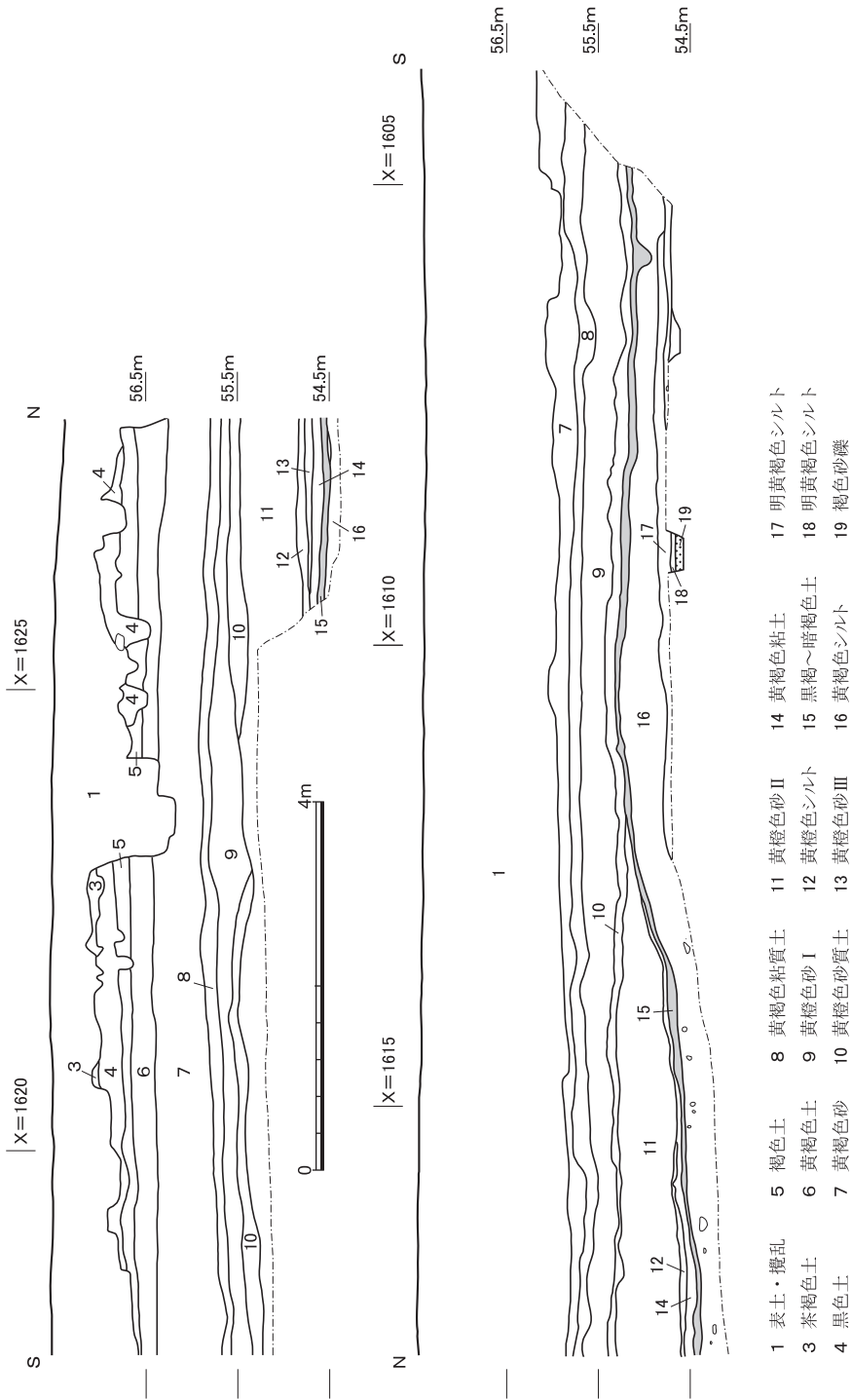
第5層の褐色土は、遺物をほとんど含まないが、C区・D区の本層からは縄文時代の石鏃が出土しているため、第5層以下は先史時代の堆積物と判断した。第6層以下は、各調査区によって堆積物の性状をやや異にする部分があるけれども、シルト・砂・砂礫といった水域環境による堆積物からなる。こうした層序の中に、A区第15層、B区第13層、D区第13層といった黒褐色～暗褐色の土壌化層が存在する。地表面から2.5～3mの深度である。こうした土壌化層は層位図を掲げていないC区でも、断ち割りによって確認しており、深度からみてこれらは連続する一連の堆積物であると推定できる。扇状地形成のある時期に、この地一帯が離水し土壌形成がなされた時期が存在したことを示している。面的に掘り下げて調査できたのはA区のみであり、人工遺物の出土は見られなかったが、土壌化層から出土した炭化材による炭素14年代測定値は、後述するように、この堆積が縄文時代草創期に遡ることを示した。

3 A区の遺構と遺物

(1) 先史時代の地形環境 (図版28, 図100)

前節で記したように、歴史時代の遺構構築の基盤となって厚く堆積する砂層中に黒褐色～暗褐色の土壌化した堆積物(第15層)を調査区壁際の断ち割りによって確認した。このため、歴史時代の調査を終了したのち、砂層を重機で除去し面的に広げて暗褐色土上面で地形測量をおこなうとともに遺物の有無を確認した(図100)。X=1612以南は平坦面となるが、それ以北は北へ向かって下っており微高地のゆるやかな起伏を示していると推定で

A区の遺構と遺物



- 1 表土・攪乱
- 2 茶褐色土
- 3 黒色土
- 4 黄褐色粘質土
- 5 黄褐色粘土
- 6 黄褐色シルト
- 7 黄褐色砂
- 8 黄褐色粘質土
- 9 黄褐色砂 I
- 10 黄褐色砂質土
- 11 黄褐色砂 II
- 12 黄褐色シルト
- 13 黄褐色砂 III
- 14 黄褐色粘土
- 15 黒褐～暗褐色土
- 16 黄褐色シルト
- 17 明黄褐色シルト
- 18 明黄褐色シルト
- 19 褐色砂礫

図98 A区西壁・A区東壁の層位 縮尺1/80

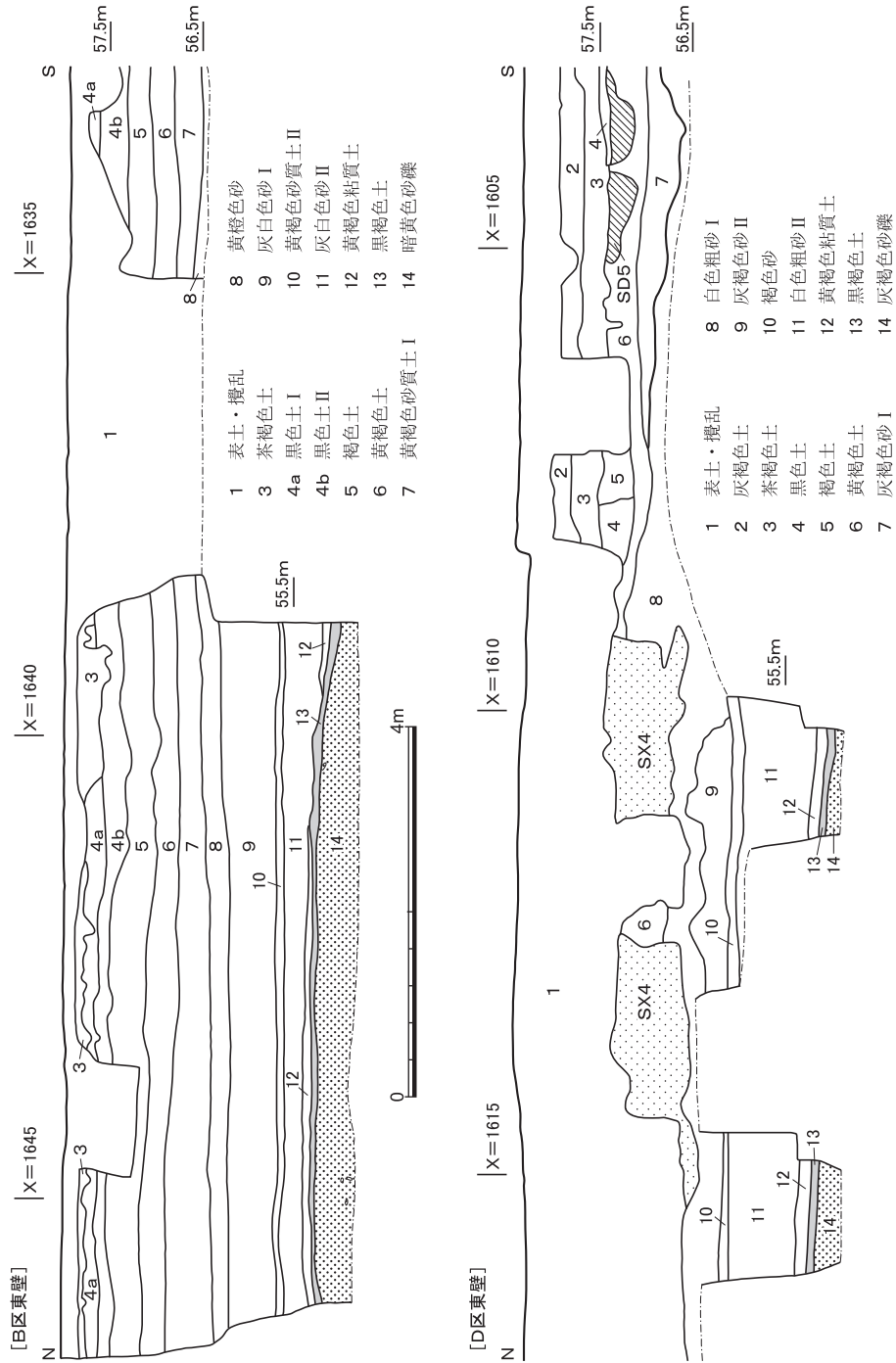


図99 B区東壁・D区東壁の層位 縮尺1/80

A区の遺構と遺物

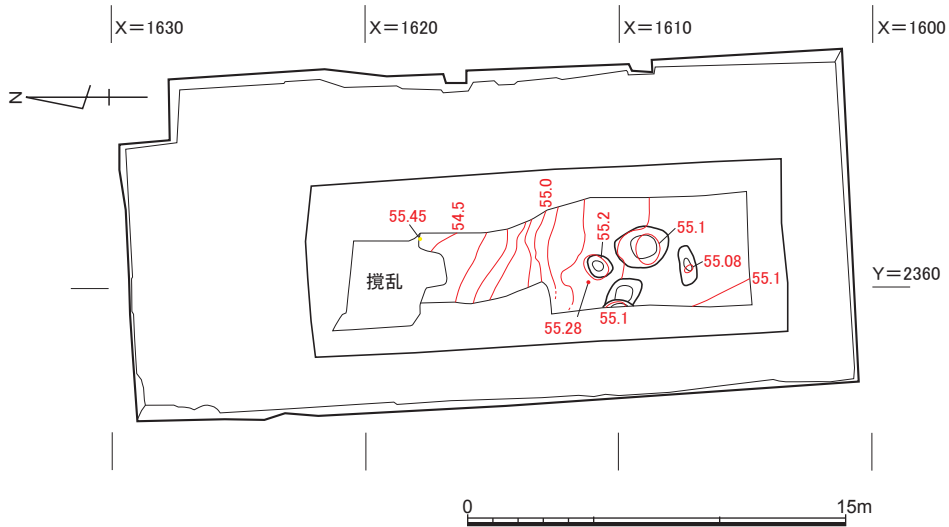


図100 A区第15層上面の地形 縮尺1/300

きた。平坦面には楕円形の落ち込みが4基認められたが、いずれからも遺物の出土はなく人工のものとは認めがたい。

第15層から人工遺物は出土しなかったが、炭化した木片を採取できたので、株式会社加速器分析研究所に依頼してAMS年代測定をおこなった。測定の結果は、 12510 ± 40 B P (IAAA-133681) で 2σ の暦年代範囲は15076-14378cal B P (95.4%) である。この年代は縄文時代草創期前半に相当する。

(2) 黑色土を埋土とする遺構 (図版27・28, 図101左)

溝SD2 SD2は、道路SF1を切りSD1に切られる、褐色土上面で検出したしっかりした南北溝であり、ほぼ真南北を通る。攪乱によって数カ所で途切れるが、A区北辺まで続くと思われる。南辺では2段落ちになっており、U字形の溝である。A区中央では東肩と底の一部のみが、北辺では底と思われる部分のみが残っており、北辺の底には不定形の凹みがあった。埋土は黑色の細砂で、遺物は少ない。幅は南辺の上面で2m前後、検出面の標高57.0m、もっとも深いところの標高は56.2mである。

南辺では、10~20cmごとの厚さで上から4回に分け、その他の場所では1~3回に分けて掘削した。南辺の埋土上半では、一段撫で面取り手法の土師器皿が出土し、下半でも同様の小片が若干出土するが、生痕等による混入の可能性もあり、溝埋積の年代は確定できない。ただし3回目・4回目の掘削では、「て」の字状口縁の比較的大型の土師器皿が複

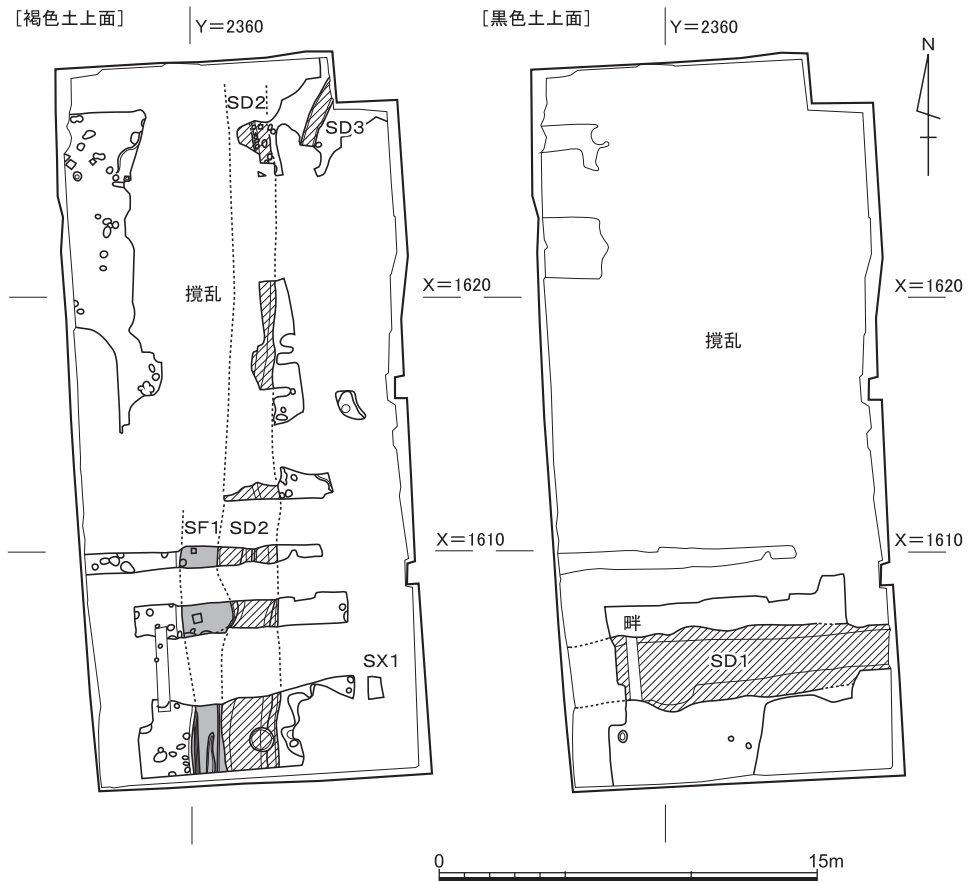


図101 A区検出の遺構 縮尺1/300

数出土しており、これは混入とは考えにくいことから、埋積年代は10世紀～13世紀の間であると推定される。位置的にはA T27区の調査におけるSD 5とつながる可能性もあるが、これは軸が真南北より東にずれていて、続くものか定かではない。

道路SF1 SF1は、南北方向の道路である。A区南辺で茶褐色土掘削後、SD1に切られる路面と思われる堅い面の上面を検出した。この堅い面の西端上部には黒色土が埋積し、東端は黒色土を埋土とするSD2に切られているが、堅い面の下にも黒色土が埋積しており、黒色土埋積中に形成され廃絶した道路と推定される。東端はSD2に切られるためその幅は不明であるが、残存部から1.5m以上はあったと推定される。埋土は鈍い褐色または暗褐色の砂質土で、堅くしまっている。路面中央部が端に比べて数cm程盛り上がりっており、検出面の標高は57.0m、路面掘削後の黒色土上面の標高は56.8～56.9m位で

A区の遺構と遺物

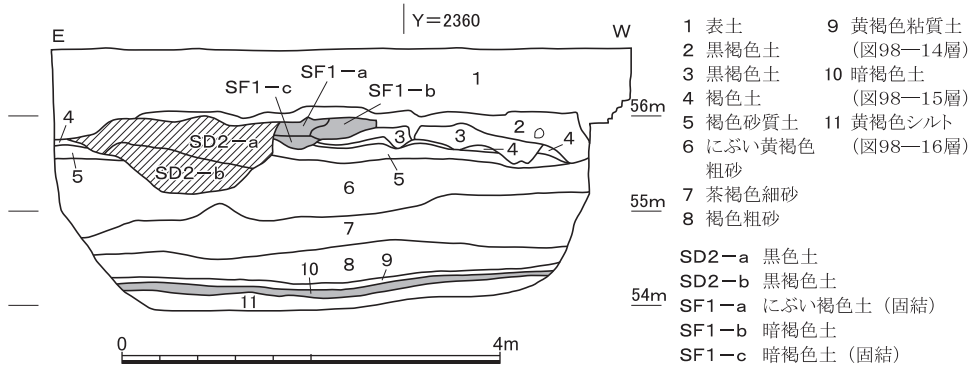


図102 SD 2・SF 1の層位 縮尺1/80

ある。埋土は一段撫で面取り口縁の土師器皿小片を含むが、生痕などによる混入の可能性もある。そのため明確な年代はわからないが、SD 2より古いことは確実である。

調査区南辺では、路面掘削後、黒色土上面で幅10~20cm以上、深さ10cm前後の轍状の堅い筋が東西に2本見付き、東側の筋はSD 2に切られていた。ただこれらはSD 1以北では見られず、中央部には灰色のシルト質の柔らかい砂や土が埋積し道路下の黒色土上面は中央部が凹む。道路直下の黒色土もやや堅くしまっているが、上の路面を固めたためであってこれは路面とは考えられない。SF 1下の黒色土中からも中世の土師器小片が出土するが、混入の可能性を捨てきれない。SF 1は、位置的にはAT 27区の調査におけるSF 3とつながる可能性が高いと判断するが、埋土が黒色土でないなど相違もある。

溝SD 3 SD 3は、表土攪乱除去後に黄褐色土上面で検出した北東から南西にかけて延びるA区北東の溝である。埋土は黒色土で、遺物は非常に少ないが、中世の遺物が数点出土した。幅は50~60cm位で、溝断面は台形状になる。検出面の標高は56.8m、底の標高は56.3mである。

落ち込みSX 1 SX 1は、SD 1掘削後A区南東に島状に残った黒色土の落ち込み部分で、中世の陶器、須恵器片などがやや集まって出土した。検出面の標高は56.9m、底の標高は56.5mである。

これらのほかに、A区各所で黒色土を埋土とする円形のピットや凹みを検出したが、明確な並びなどは見いだされなかった。これらからの出土遺物は少なく、古代の遺物も含むが多くは中世前半の遺物であった。

(3) 茶褐色土を埋土とする遺構 (図101右)

溝SD 1 SD 1はA区南辺の黒色土上面で検出した。しっかりしたU字形の東西溝

京都大学本部構内A U27区の発掘調査

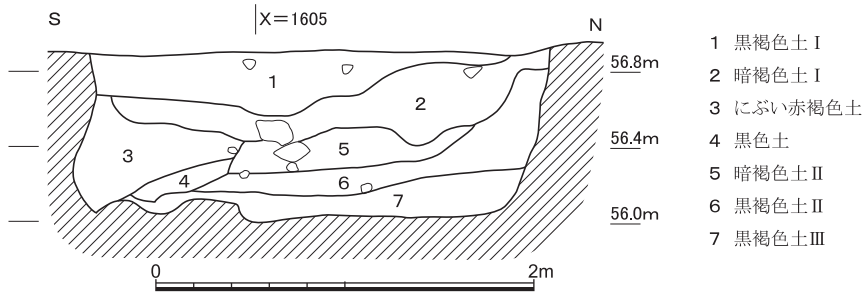


図103 S D 1 畔東壁の層位 縮尺1/40

であり、A区全体を東西に貫く。軸は真東西よりも若干東北東に傾く。埋土は、包含層の埋土より若干暗い茶褐色土である。幅は上面で2.5～3m位、底で1.5m前後。検出面の標高は57.0m、もっとも深いところで標高は55.9m、全般的に溝の深さは1m位であり、約10～20cmごとに上から6回に分けて掘削した。黒色土を埋土とする溝SD2及び道路SF1を切っており、SF1を切った部分のSD1南壁はやや南に張り出している、この部分の底近くの埋土には、SF1及びその直下の黒色土由来と思われる堅くて黒い土を含む。溝土層断面観察のために設けた西辺の畔の北東には、埋土下半に礫と土器がやや集中した部分があり、骨片も含まれていた。遺物は溝の東部よりも西部の方が多い。遺物量は溝全体で整理箱3箱であり、そう多くはない。埋土遺物の年代は大半が13世紀のものであり、中世後半の遺物も含む茶褐色土包含層よりも古い。

(4) 出土遺物 (図104～107)

SD2出土遺物 (Ⅲ1～Ⅲ5) Ⅲ1～Ⅲ4は土師器皿で、Ⅲ1・Ⅲ4は1段撫で手法のD₃類とD₅類。Ⅲ2・Ⅲ3は「て」字状口縁手法のB₃類。Ⅲ1・Ⅲ4はSD2の上半、Ⅲ2・Ⅲ3はSD2の下半から出土している。Ⅲ5は須恵器杯。

SX1出土遺物 (Ⅲ6) Ⅲ6は陶器甕。上半部を欠損する。

黒色土出土遺物 (Ⅲ7～Ⅲ16) Ⅲ7～Ⅲ12は土師器皿。Ⅲ7・Ⅲ9・Ⅲ12は、1段撫で面取りのD₄類、Ⅲ8・Ⅲ10・Ⅲ11は1段撫で素縁のD₂類。Ⅲ13は須恵器杯。Ⅲ14・Ⅲ15は緑釉陶器の底部。ともに貼り付け高台で、Ⅲ15は見込みが蛇の目状に凹んでいる。Ⅲ16は青磁の椀。

SD1出土遺物 (Ⅲ17～Ⅲ96) Ⅲ17～Ⅲ49は土師器皿。灰白色のⅢ23を除いて、橙褐色。口径が7.5cm～10cm (Ⅲ17～Ⅲ31)、11cm～12cm (Ⅲ32～Ⅲ35)、13cm～16cm (Ⅲ36～Ⅲ49)の3群が認められる。1段撫で手法のD₄・D₅類が主体を占め、2段撫で手法の

A区の遺構と遺物

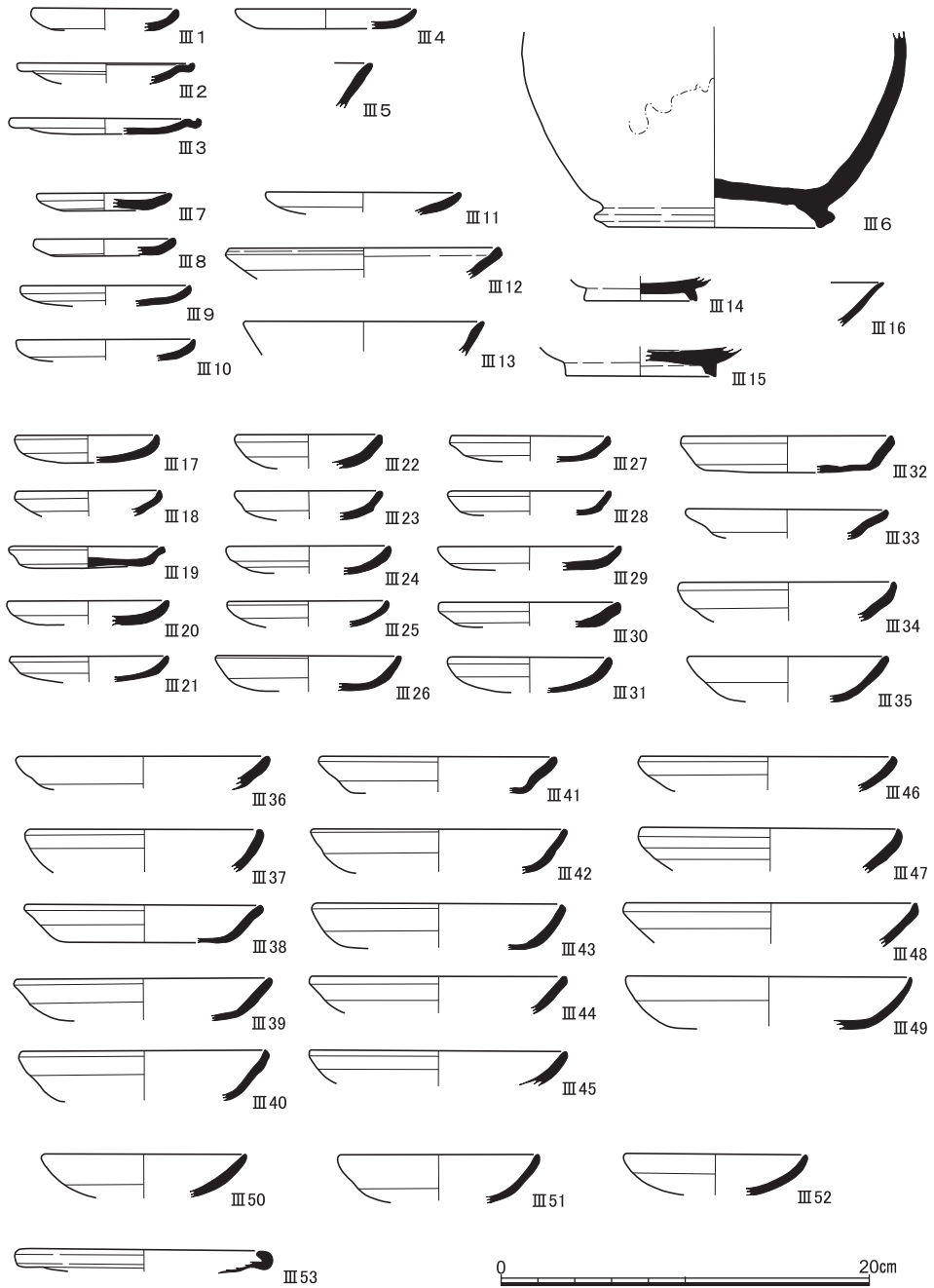


図104 S D 2 出土遺物 (Ⅲ 1～Ⅲ 5 土師器), S X 1 出土遺物 (Ⅲ 6 陶器, 黒色土出土遺物 (Ⅲ 7～Ⅲ 12 土師器, Ⅲ 13 須恵器, Ⅲ 14・Ⅲ 15 緑釉陶器, Ⅲ 16 青磁), S D 1 出土遺物(1) (Ⅲ 52～Ⅲ 53 土師器)

C類(Ⅲ24・Ⅲ47)、1段撫で素縁手法のE類(Ⅲ33)をわずかに含む。Ⅲ50～Ⅲ52は灰白色を呈する土師器椀。Ⅲ53は土師器受皿。灰白色を呈し、口径13cmをはかる。

Ⅲ54・Ⅲ55は土師器の甕で、Ⅲ54は内外面とも撫で仕上げ、Ⅲ55は外面撫で仕上げ、内面には右上がりの刷毛目を残す。Ⅲ56は土師器鉢。口縁外面直下に、輪積みの痕跡を残す。内面および口縁部外面は横撫でによって整形している。Ⅲ57は白色土器の椀の底部。Ⅲ58～Ⅲ60は土師器高杯の脚部。Ⅲ58・Ⅲ59は面取り整形している。

Ⅲ61は須恵器杯蓋。Ⅲ62～Ⅲ67は東播系の須恵器鉢。Ⅲ68は須恵器で壺の底部か。Ⅲ69・Ⅲ70は灰釉系陶器の底部。Ⅲ71は陶器甕。Ⅲ72は舶載の緑釉陶器盤。底部外面を除き、内外面に緑釉を施している。

Ⅲ73は瓦器椀。磨きは内面のみであり、外面には施されない。口縁部の特徴から、楠葉型とみられる。Ⅲ74～Ⅲ76は瓦器羽釜。いずれも口縁部は短く、体部はやや丸みを帯びる。Ⅲ76は体部外面に煤が厚く付着する。Ⅲ77は瓦器鍋。口縁部は2段に屈曲し、強く面取りされた口縁端部は凹んでいる。

Ⅲ78・Ⅲ79は青磁の椀で、Ⅲ78は見込みに劃花文、Ⅲ79は体部外面に蓮弁文をもつ。Ⅲ80～Ⅲ82は白磁の椀で、Ⅲ80は口縁部を玉縁とする。Ⅲ83は白磁合子の身。

Ⅲ84は砥石。Ⅲ85～Ⅲ96は瓦で、Ⅲ85・Ⅲ86は軒丸瓦、Ⅲ87～Ⅲ91は丸瓦、Ⅲ92～Ⅲ96は平瓦である。Ⅲ85は内区に三巴文、外区に珠文を置く。内区の文様は不明だが、Ⅲ86も外区に珠文を置いている。Ⅲ88は玉縁凸面に並行する2本の刻線による篋記号が認められる。Ⅲ96は端面に篋記号がみられる。

小穴出土遺物(Ⅲ97・Ⅲ98) 茶褐色土を埋土とする小穴(ピット)から出土した。Ⅲ97はD₄類、Ⅲ98はD₆類の土師器皿である。

茶褐色土出土遺物(Ⅲ99～Ⅲ119) Ⅲ99は灰白色で土師質であるが、内外面に磨きを施し、口縁部内面に浅い沈線が1条めぐる。Ⅲ100～Ⅲ104・Ⅲ106・Ⅲ107は土師器皿。B₄類(Ⅲ104)、C類(Ⅲ100・Ⅲ101)、D類(Ⅲ102・Ⅲ103・Ⅲ106)、F₂類(Ⅲ107)などが出土している。Ⅲ105は灰白色の土師器椀。

Ⅲ108は須恵器杯蓋。Ⅲ109は緑釉陶器椀の底部。Ⅲ110・Ⅲ111は灰釉系陶器の底部で、Ⅲ111の高台端部に刳殻痕がみられる。Ⅲ112は古瀬戸で、口縁端部を部分的に挟り輪花としている。Ⅲ113・Ⅲ114は青磁。Ⅲ115は青白磁合子の蓋。上面に花卉状の文様を施している。Ⅲ116は白磁の椀で、口縁部を無釉としている。Ⅲ117は瓦器の盤。

Ⅲ118・Ⅲ119は平瓦。凸面には縄叩き目を残し、Ⅲ119は内面に布目圧痕をもつ。

A区の遺構と遺物

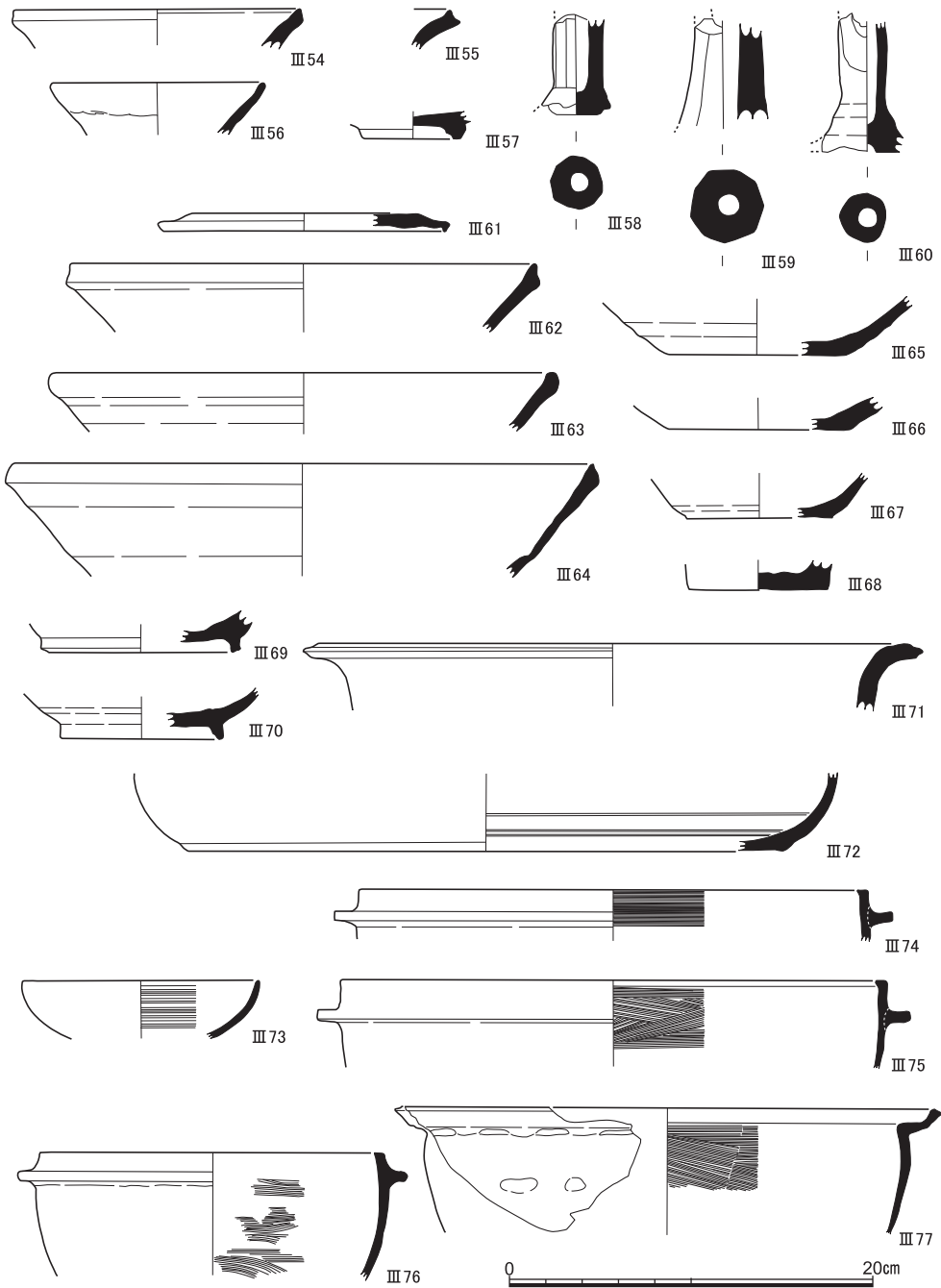


図105 S D 1 出土遺物(1) (III 54~III 56・III 58~III 60土師器, III 57白色土器, III 61~III 68須恵器, III 69・III 70灰釉系陶器, III 71・III 72陶器, III 73~III 77瓦器)

京都大学本部構内A U27区の発掘調査

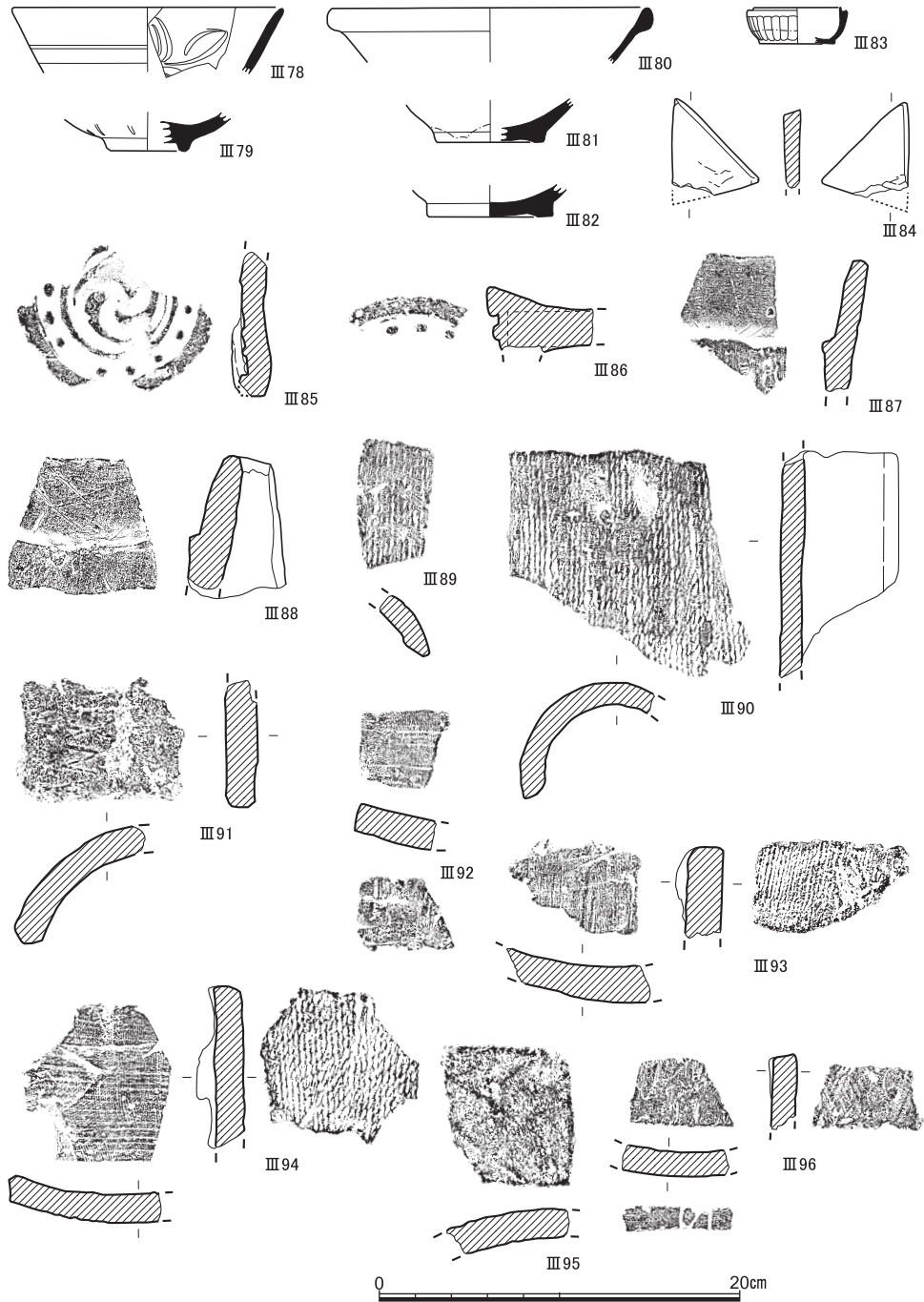


図106 S D 1 出土遺物(3) (III 78・III 79青磁, III 80～III 83白磁, III 84砥石, III 85～III 96瓦)

A区の遺構と遺物

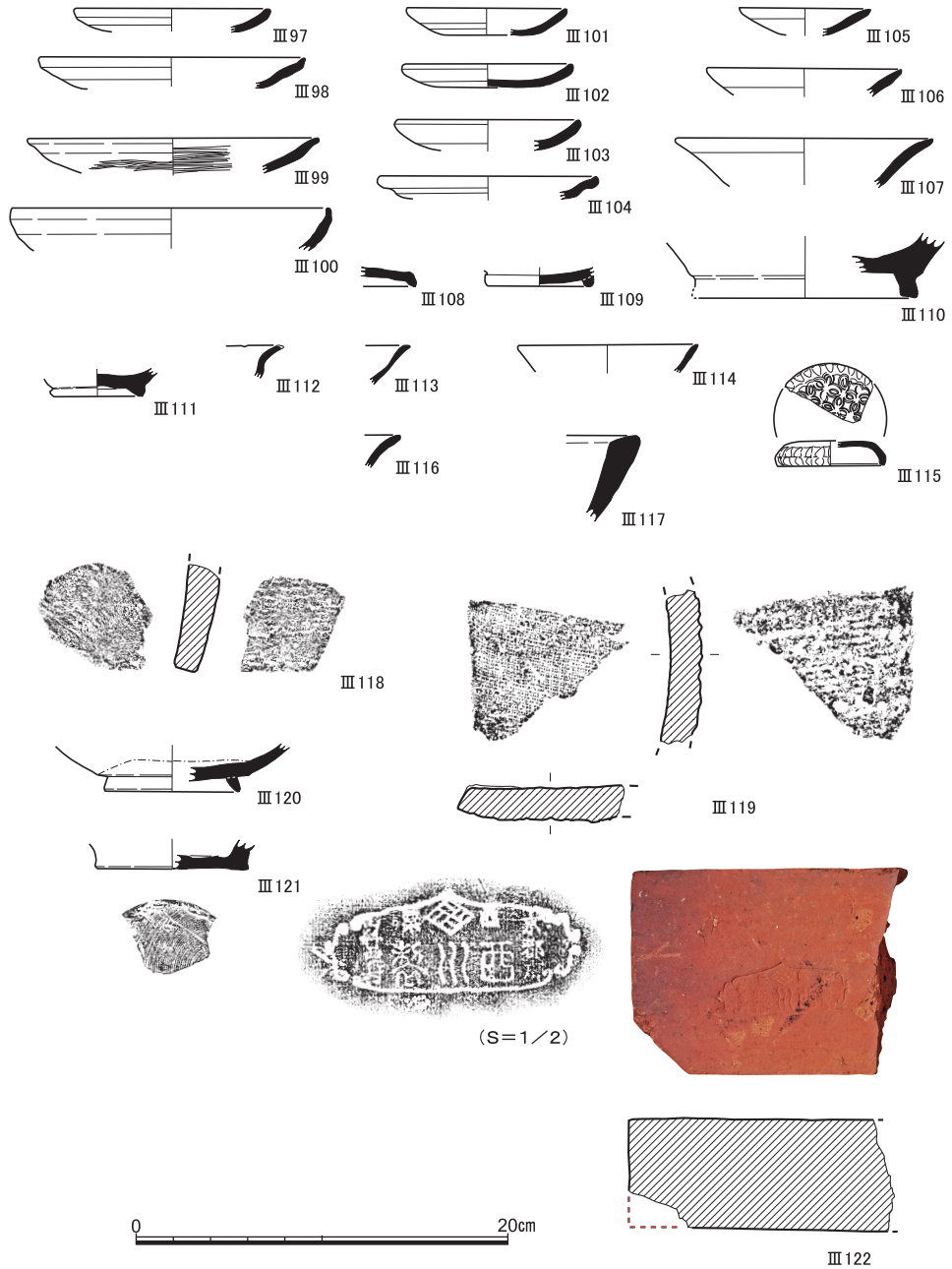


図107 小穴出土遺物（Ⅲ97・Ⅲ98土師器），茶褐色土出土遺物（Ⅲ99～Ⅲ107土師器，Ⅲ108須恵器，Ⅲ109緑釉陶器，Ⅲ110・Ⅲ111灰釉系陶器，Ⅲ112古瀬戸，Ⅲ113・Ⅲ114青磁，Ⅲ115青白磁，Ⅲ116白磁，Ⅲ117瓦器，Ⅲ118・Ⅲ119瓦），断割出土遺物（Ⅲ120灰釉陶器，Ⅲ121須恵器），表土出土遺物（Ⅲ122煉瓦）

京都大学本部構内A U27区の発掘調査

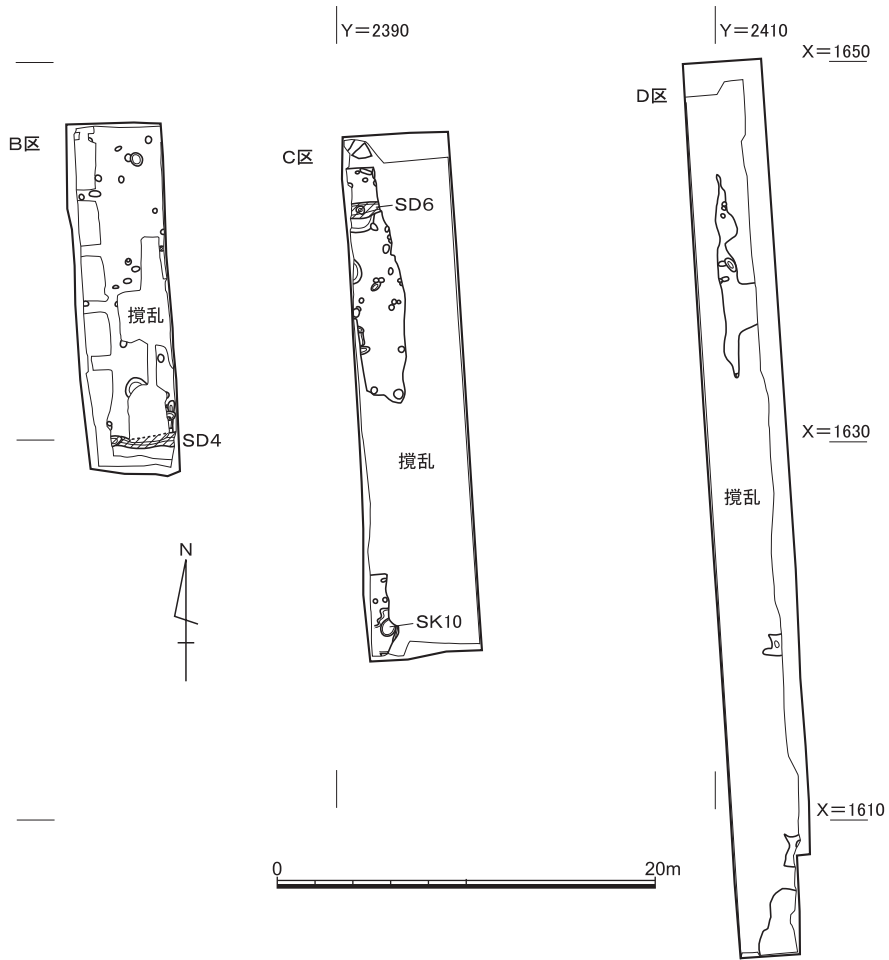


図108 B区・C区・D区褐色土上面検出遺構 縮尺1/400

断ち割り時出土遺物 (Ⅲ120・Ⅲ121) 調査区南壁際を断ち割りしたさいに出土した遺物。Ⅲ120は灰釉陶器碗。高台が外へ開く形状で、灰釉は漬け掛けしている。Ⅲ121は須恵器底部。底部は回転糸切り成形である。

表土出土遺物 (Ⅲ122) Ⅲ122は煉瓦で、幅10.9cm、厚さ5.6cmをはかる。長さは一端を欠損するため不明。残存する角2カ所のうち、1カ所は斜めに切り落とされている。「商票 京都府 西川製 山科西ノ村」と判読できる刻印が押されている。

B区の遺構と遺物

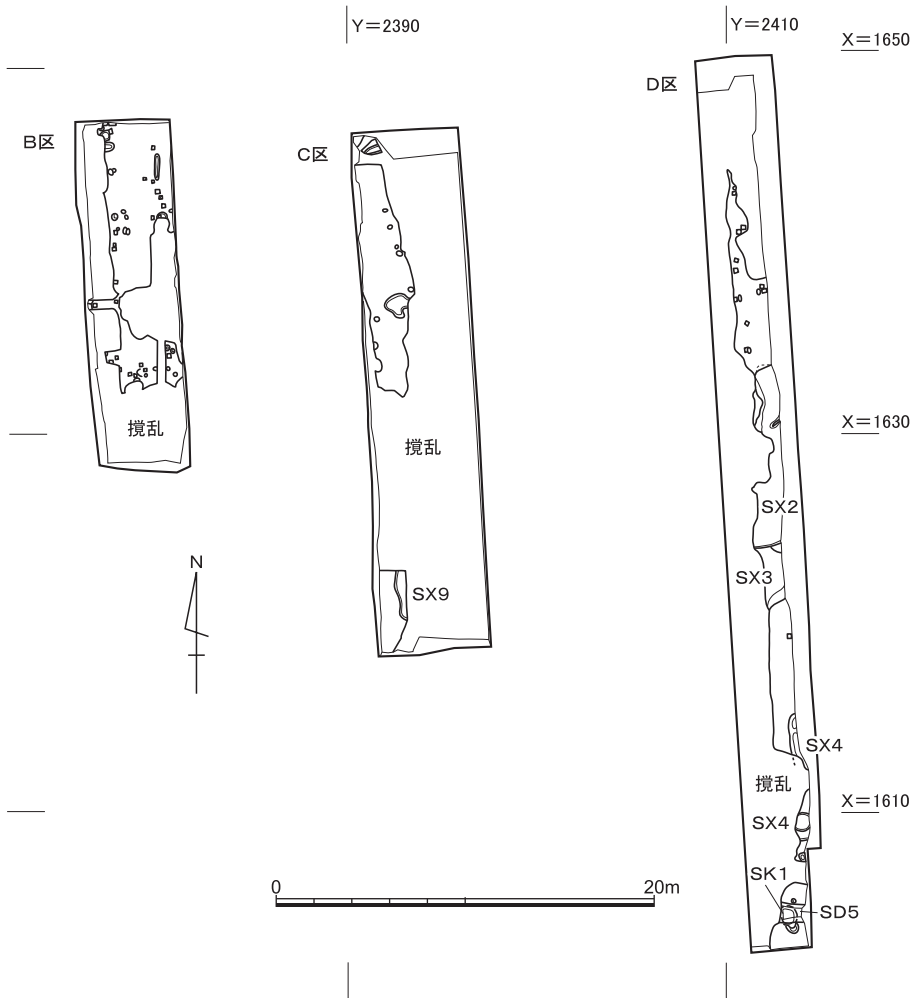


図109 B区・C区・D区黒色土上面検出遺構 縮尺1/400

4 B区の遺構と遺物

(1) 黒色土を埋土とする遺構 (図108)

溝SD4 SD4は、B区南辺の褐色土上面で検出した東西溝で、B区の東端と西端では深くなる。埋土は黒色の細砂で、遺物はほとんどなく時期不明である。幅は50～80cmくらいで、検出面の標高は57.2m、その部分での底の標高は56.9m、最深部の標高は56.5mである。C区はこの溝の延長部分にあたる場所にはSX8があり、この溝がC区まで続いていたかは不明である。

京都大学本部構内A U27区の発掘調査

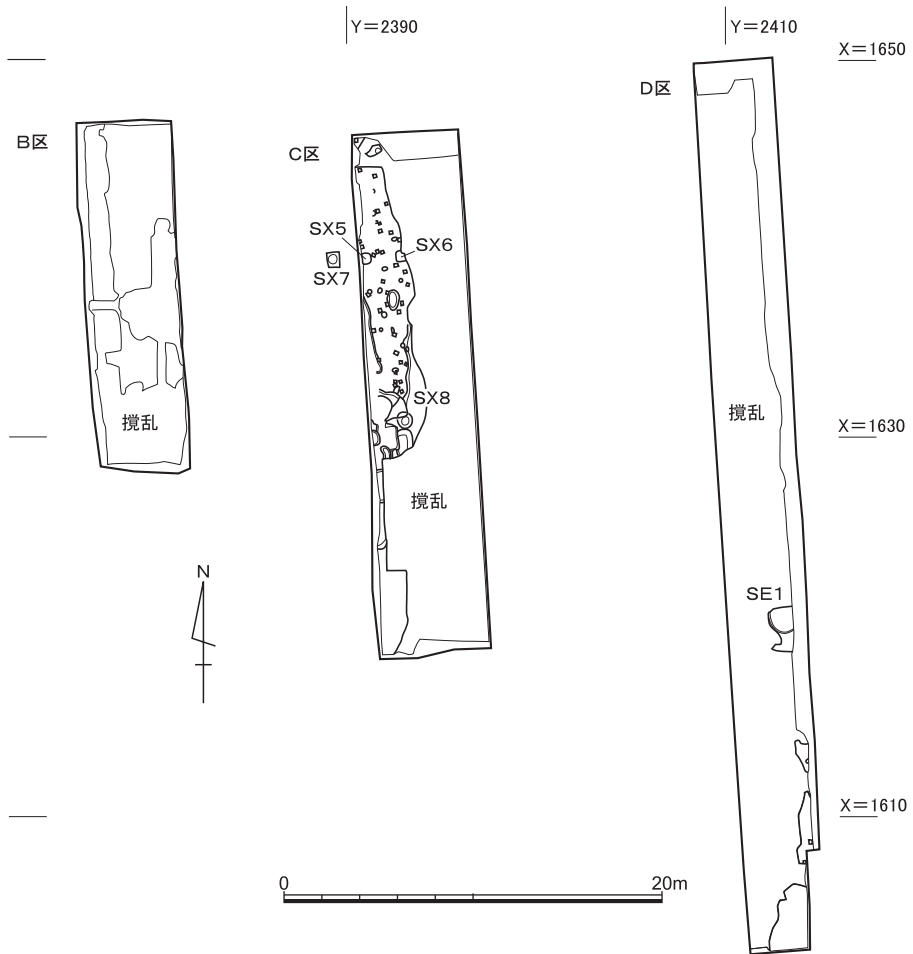


図110 B区・C区・D区茶褐色土上面検出遺構 縮尺1/400

このほか、B区各所で黒色土を埋土とする楕円形ピットまたは凹みを検出した。出土遺物は少ないが、その年代がわかるものは古代～中世前半である。

(2) 茶褐色土を埋土とする遺構 (図109)

B区では、包含層としての灰褐色土は残っておらず、茶褐色土と灰褐色土との判別は困難であった。その結果、茶褐色土を埋土とするピットとして掘削した遺構、とりわけ一辺15cm前後の方形ピットの多くは近世の遺物を含み、近世ピットと考えられる。

近世の遺物が出土していないピットは、中世か近世か不明である。

B区の遺構と遺物

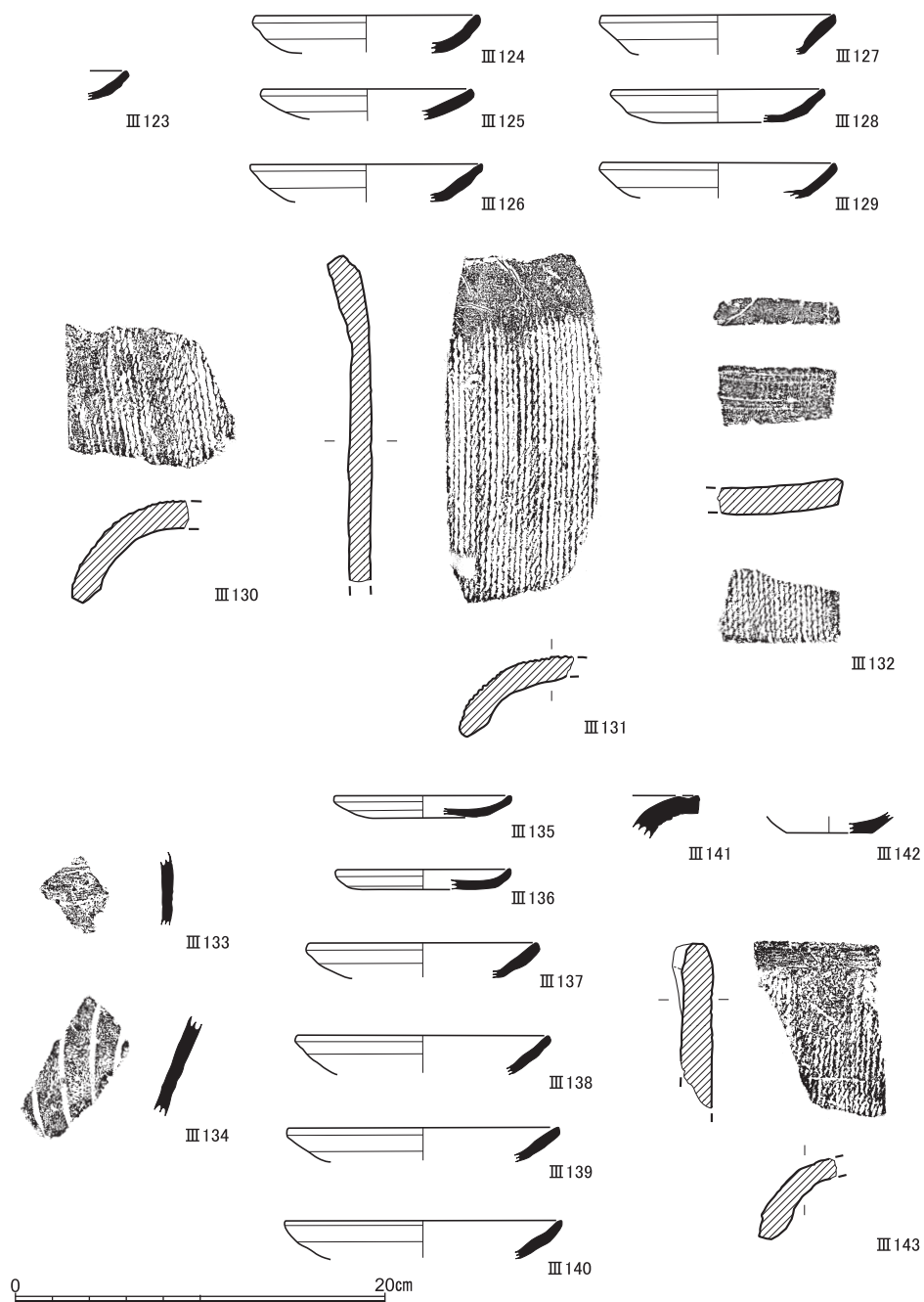


図111 小穴出土遺物（Ⅲ123～Ⅲ129土師器，Ⅲ130・Ⅲ131丸瓦，Ⅲ132平瓦），褐色土出土遺物（Ⅲ133縄文土器），黒色土出土遺物(1)（Ⅲ134縄文土器，Ⅲ135～Ⅲ140土師器，Ⅲ141須恵器，Ⅲ142白磁，Ⅲ143丸瓦）

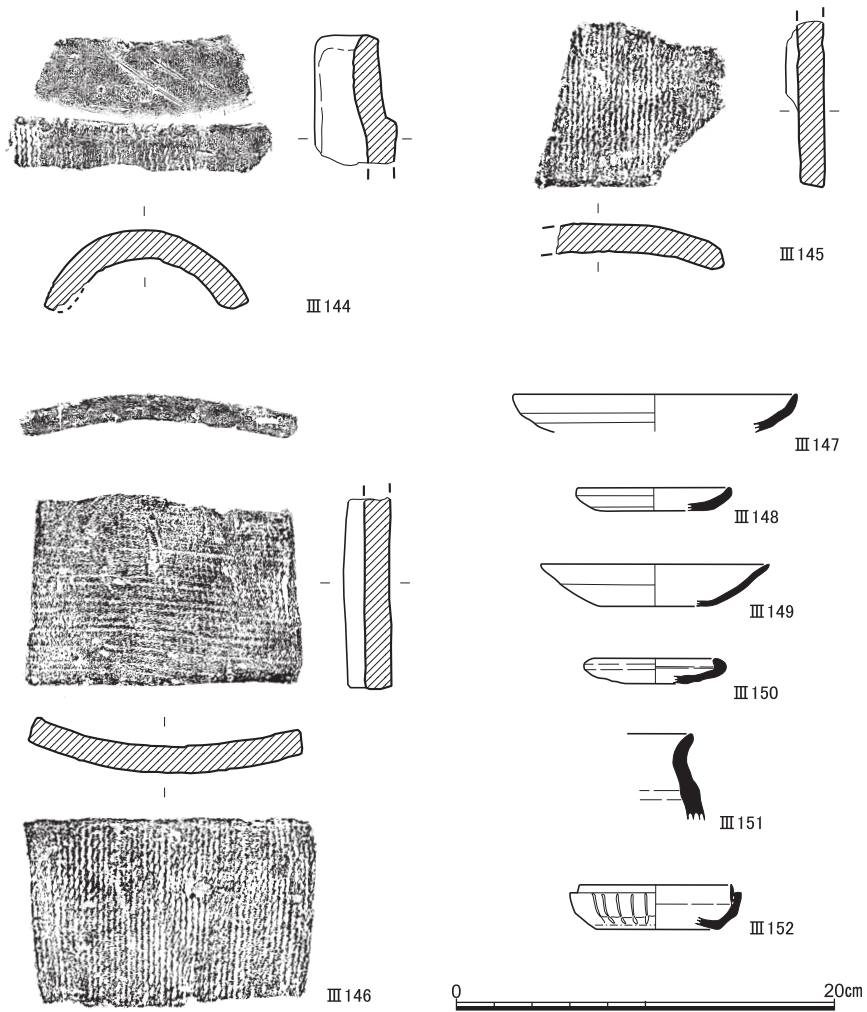


図112 黒色土出土遺物(2) (Ⅲ144丸瓦, Ⅲ145・Ⅲ146平瓦), 茶褐色土出土遺物 (Ⅲ147～Ⅲ151土師器, Ⅲ152青白磁)

(3) 出土遺物 (図111・112)

小穴出土遺物 (Ⅲ123) Ⅲ123は黒色土を埋土とする小穴 (ピット) より出土。2段撫で手法のC₅類の土師器皿。

S P 38出土遺物 (Ⅲ124～Ⅲ132) Ⅲ124は1段撫で手法のD₄類, Ⅲ125～Ⅲ127はD₅類, Ⅲ128・Ⅲ129はD₆類の土師器皿。

Ⅲ130・Ⅲ131は丸瓦。いずれも凸面には縄叩きをほどこし, 凹面には布目痕が残る。Ⅲ

C区の遺構と遺物

132は平瓦。凸面には縄叩き痕、凹面には糸切り痕が認められる。端面に斜線の篋記号を有する。

褐色土出土遺物（Ⅲ133） Ⅲ133は縄文土器の小片。内外面とも粗く撫でて仕上げている。後晩期のものと思われる。

黒色土出土遺物（Ⅲ134～Ⅲ146） Ⅲ134は縄文土器。弧線を描いて垂下する4本の沈線が認められる。中期末の北白川C式か後期前葉の北白川上層式の胴部と思われるが、決めがたい。Ⅲ135はD₄類、Ⅲ136はD₅類の土師器小皿。Ⅲ137～Ⅲ140はD₅類の土師器皿。Ⅲ141は須恵器長頸壺の口縁部片。その端部はつまみあげられている。Ⅲ142は白磁。底部外面を露胎とする。

Ⅲ143・Ⅲ144は丸瓦。ともに凸面に縄叩き痕、凹面に布目痕がみられる。後者の玉縁の凸面には、篋によって2本の平行線が刻まれている。Ⅲ145・Ⅲ146は平瓦。前者は凸面に縄叩きをほどこし、両面ともに離れ砂が付着している。後者は凸面に縄叩き痕、凹面に糸切り痕が認められる。端面のへりのところに1本線の篋記号をもつ。

茶褐色土出土遺物（Ⅲ147～Ⅲ152） Ⅲ147はC₃類の土師器皿。Ⅲ148はD₅類の土師器小皿。Ⅲ149は白色の土師器椀。Ⅲ150は土師器受皿。Ⅲ151は土師器小壺。

Ⅲ152は青白磁の合子身。体部下端から底部外面にかけてを露胎とする。

5 C区の遺構と遺物

(1) 黒色土を埋土とする遺構（図108）

土坑S K 10 調査区南西の褐色土上面で検出された、古代の土師器杯が出土した土坑で、北東隅をS X 9に切られ、南西・南東部を攪乱に切られる。検出面の標高は57.2m、底の標高は56.8mである。底は白砂まで到達していないので、砂取穴とは性質が異なる遺構と理解できる。

溝S D 6 C区北辺の褐色土上面で検出された東西溝。幅は50～80cmくらいで、検出面の標高は57.5m、最深部の標高は56.6mであるが、全体的には深さ50～60cmくらいである。遺物は非常に少なく、年代は不明である。溝の続きはB区、D区でみつからない。

このほか、黒色土を埋土とする凹みまたは円形のピットがみついているが、出土遺物は少ない。

(2) 茶褐色土を埋土とする遺構（図109）

土坑S X 9 C区南西の黒色土上面で検出された中世の遺物を含む土坑である。埋土

は砂質で、互層状の埋積ではないが、白砂まで掘りくぼめられており、砂取穴の可能性がある。検出面の標高は57.1m、底の標高は56.1mである。

そのほか、おもに北辺において、茶褐色土を埋土とする凹み・円形ピットがいくつか検出された。

(3) 灰褐色土を埋土とする遺構（図版28、図110）

集石 S X 5～7 中心がほぼ1.8m間隔で真東西の方向に並ぶC区北辺とC区西外の集石である。灰褐色土掘削中に検出し、いずれも東西、南北とも50cm前後の範囲に隅丸形状に花崗岩の割石を配置している。S X 6は東側を攪乱に切られ、S X 5は西側が調査区西壁内となる。S X 7は、S X 5・6の性格を考えるためにC区調査区の西外に設けた試掘坑内で見つかった。検出面の標高は57.9～58.0m、集石を除去した底の標高は57.7～57.8mである。

S X 5の直下から方形のピットが検出され、その埋土の遺物に近世陶器小片が含まれることから、これらの集石の年代も近世以降の可能性が高いと思われる。

この集石列の延長は、B区、D区ではみつかっていない。

不定形土坑 S X 8 C区中央から南にかけて、茶褐色土上面で検出した不定形の土坑である。その西部は攪乱で切られて、ほかの部分とは直接つながらない。検出面での埋土は灰褐色土だが、南の深くなる部分では黒色土、黄褐色土、砂などが互層状に埋積する。

落ち込み C区中央付近で南に大きく落ちる部分があり、落ち際の肩はオーバーハングする。底は白砂層がなくなる手前まで掘りくぼめられており、白砂を狙った砂取穴と推定される。検出面の標高は57.8m、最深部の標高は55.3mである。

埋土中の遺物は少なく、その大半は中世後半を含む中世の遺物である。近世の遺物も若干含むが、混入の可能性を捨てきれず、15世紀以降、近世までのあいだに埋積した遺構としかいえない。

そのほか、一辺15cm前後のものを主体とする方形ピットや円形ピットが各所で検出され、そのいくつかは近世の遺物を含む。

(4) 出土遺物（図113・114）

S X 10出土遺物（Ⅲ153） Ⅲ153は土師器杯。口縁部は外反し、その端を内側に折り曲げている。口縁部外面から体部外面上半にかけて横撫でをほどこし、その下半にはかすかに削りの痕跡が認められる。見込みに暗文を有する。

S X 9出土遺物（Ⅲ154） Ⅲ154はD₃類の土師器小皿。

C区の遺構と遺物

S X 8 出土遺物 (Ⅲ155～Ⅲ157) Ⅲ155は1段撫で手法のE₃類, Ⅲ156は1段撫で手法のF₄類の土師器皿。Ⅲ157は灰釉陶器。

S X 7 出土遺物 (Ⅲ158・Ⅲ159) Ⅲ158は灰白色の土師器高杯の脚部。Ⅲ159は硯。底面にも擦痕が観察できるので, 破損後, 砥石として転用された可能性がある。

S P 81 出土遺物 (Ⅲ160・Ⅲ161) Ⅲ160はD₂類の土師器皿。Ⅲ161は白色の土師器小椀。

S P 70 出土遺物 (Ⅲ162) Ⅲ162は土師器灯明皿。見込みに圈線がめぐり, 内面から口縁部外面の端にかけて煤がべったり付着している。

褐色土出土遺物 (Ⅲ163) Ⅲ163は縄文時代の石鏃。凹基式で先端部を欠損する。肉眼観察では, 石材は二上山産サヌカイトとみられる。現重量0.7g。

黒色土出土遺物 (Ⅲ164～Ⅲ167) Ⅲ164・Ⅲ165はC₂類, Ⅲ166はC₃類, Ⅲ167はC₄類の土師器皿。

茶褐色土出土遺物 (Ⅲ168～Ⅲ186) Ⅲ168～Ⅲ175は土師器杯・皿。Ⅲ168は「て」字状口縁手法のB₃類, Ⅲ169はB₄類, Ⅲ170はC₃類, Ⅲ171はD₂類, Ⅲ172はD₃類, Ⅲ173・Ⅲ174はF₁類, Ⅲ175はF₂類。Ⅲ176は灰白色の土師器小椀。

Ⅲ177～Ⅲ179は須恵器すり鉢。Ⅲ180～Ⅲ182は灰釉陶器。Ⅲ180・Ⅲ181は椀で, 前者の口縁部内面には浅い沈線が認められる。Ⅲ182は高台が断面三角形を呈し, 外側にやや開いている。底部内面に灰釉がみうけられる。Ⅲ183・Ⅲ184は青磁, Ⅲ185・Ⅲ186は白磁の口縁部片。

灰褐色土出土遺物 (Ⅲ187～Ⅲ201) Ⅲ187は灰白色の土師器小椀。口縁端部をつまみあげている。Ⅲ188は灰白色の土師器椀。Ⅲ189は近世の土師器灯明皿。口縁端部に煤がわずかに付着している。Ⅲ190～Ⅲ193は土師器焙烙。

Ⅲ194は灰釉陶器。高台は縦長で, 断面二等辺三角形を呈する。Ⅲ195～Ⅲ199は陶器。Ⅲ195は灯明皿で, 内面に6本の浅い平行沈線が認められる。Ⅲ197の底部外面には「八〇」の墨書がみられる。Ⅲ200は磁器染付の椀。Ⅲ201は硯。

表土出土遺物 (Ⅲ202～Ⅲ205) Ⅲ202は縄文晩期末の凸帯文土器。口縁部からやや下がった位置に凸帯を貼り付け, D字状の刻みをほどこしている。Ⅲ203は菊丸瓦で, 八弁の菊花文を配する。Ⅲ204は剣頭文, Ⅲ205は唐草文の軒平瓦。

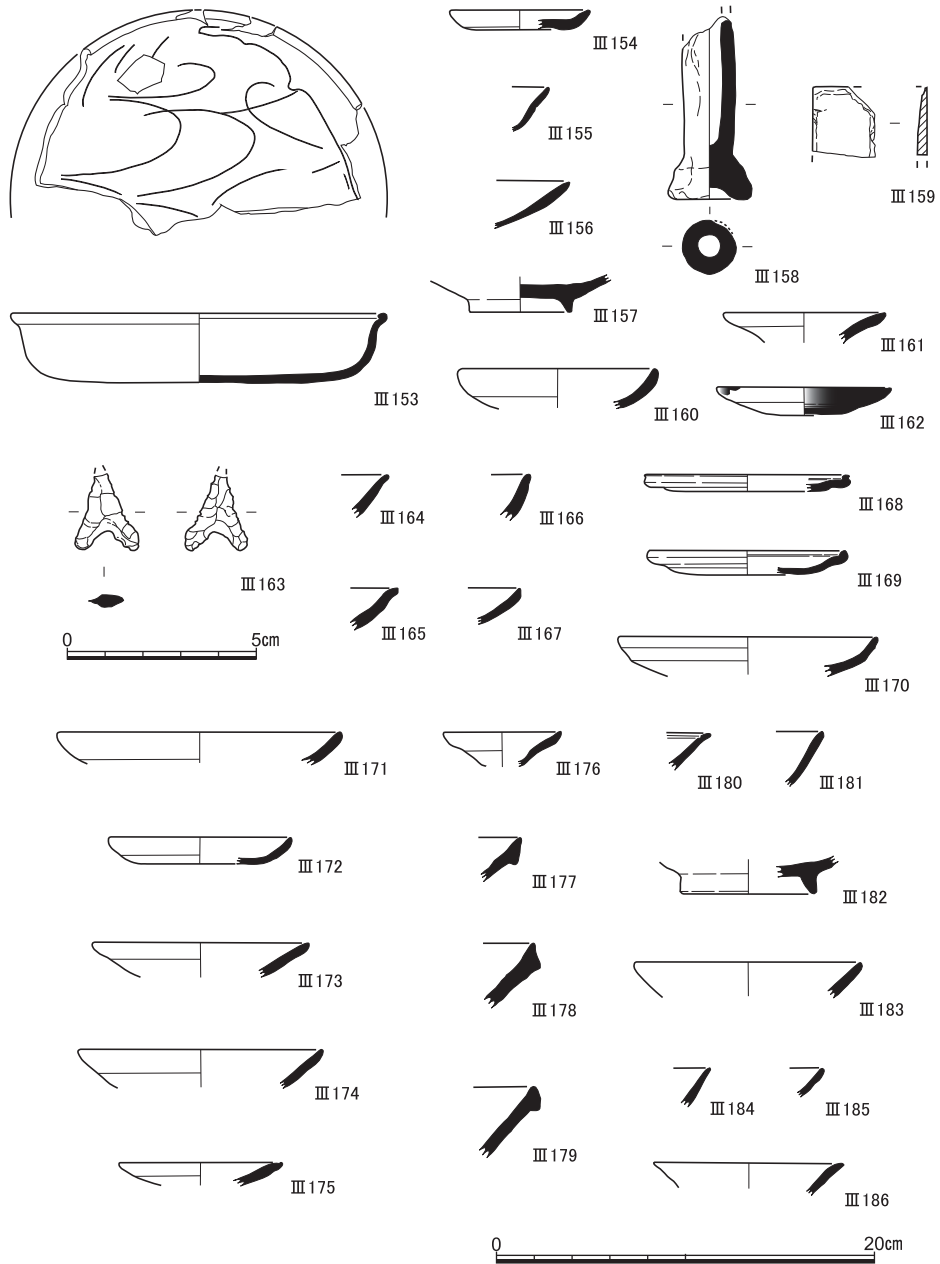


図113 S X 10出土遺物 (Ⅲ153土師器), S X 9出土遺物 (Ⅲ154土師器), S X 8出土遺物 (Ⅲ155・Ⅲ156土師器, Ⅲ157灰釉陶器), S X 7出土遺物 (Ⅲ158土師器, Ⅲ159硯), 小穴出土遺物 (Ⅲ160～Ⅲ162土師器), 褐色土出土遺物 (Ⅲ163石鏃), 黒色土出土遺物 (Ⅲ164～Ⅲ167土師器), 茶褐色土出土遺物 (Ⅲ168～Ⅲ176土師器, Ⅲ177～Ⅲ179須恵器, Ⅲ180～Ⅲ182灰釉陶器, Ⅲ183・Ⅲ184青磁, Ⅲ185・Ⅲ186白磁) Ⅲ163: 縮尺1/2

D区の遺構と遺物

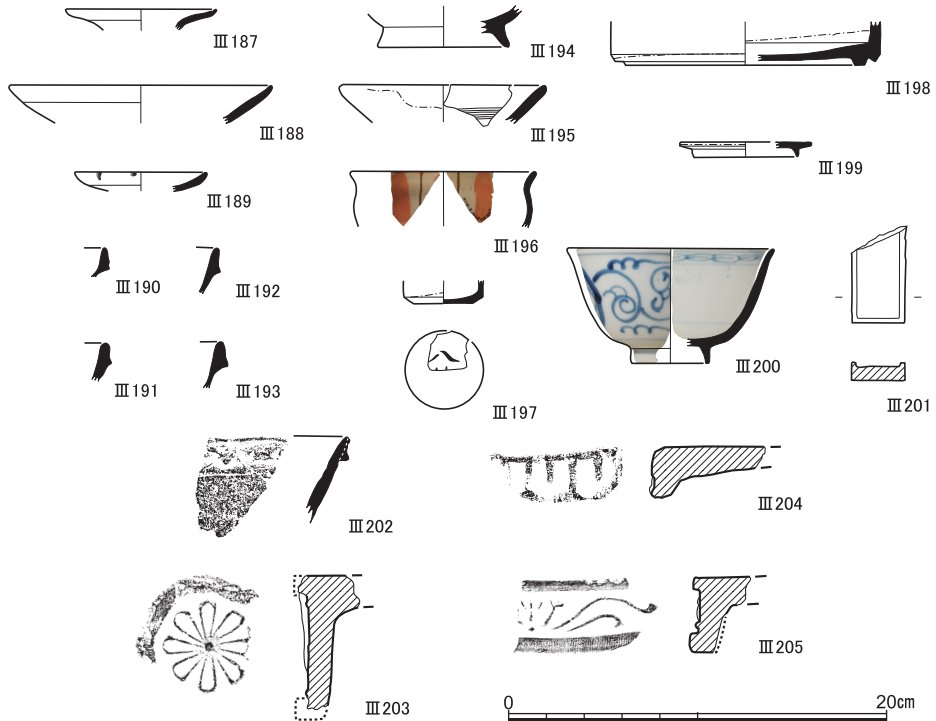


図114 灰褐色土出土遺物（Ⅲ187～Ⅲ193土師器，Ⅲ194灰釉陶器，Ⅲ195～Ⅲ199陶器，Ⅲ200磁器，Ⅲ201硯），表土出土遺物（Ⅲ202縄文土器，Ⅲ203丸瓦，Ⅲ204・Ⅲ205軒平瓦）

6 D区の遺構と遺物

(1) 黒色土を埋土とする遺構（図108）

おもにD区北辺で、遺物をほとんど含まない黒色土を埋土とする凹みまたは円形ピットがいくつか検出されたのみであった。

(2) 茶褐色土を埋土とする遺構（図109）

溝SD5 SD5は、D区南辺の黄褐色土上面で検出された東西溝である。埋土には、茶褐色土の他、黒色土や黄褐色土も含む。幅1m前後であり、検出面の標高は57.4m、底の標高は57.1mである。遺物は少ないが中世の土師器・陶器片を含む。

土坑SK1 SK1は根石を伴う土坑で、SD5に切られる。SD5掘削後に黄褐色土上面で検出し、南北1.5m、東西80cm以上の楕円形に近い堀方をもつ。中心部の深くなる部分は北側に寄り、南北1m位である。その底から30×25cm位の平らな根石が出土した。検出面の標高は57.3m、根石上の標高は56.2m、底の標高は56.1mである。埋土からは中

世の土師器小片が出土した。

不定形土坑S X 2 S X 2は、D区中央の広範囲を占める不定形の土坑で、茶褐色土包含層の下に埋積する。埋土は黒色土、黄褐色土、砂などを互層状に含み、その中央の最深部は白砂がなくなる暗褐色砂質土の上面近くまでで終わっているため、白砂の採取を目的とした砂取穴と推定される。北肩は黄褐色土上面検出で、オーバーハングしている。検出面の標高は57.4m、最深部の標高は55.5mである。出土遺物はあまり多くなく13世紀のものが主体である。

不定形土坑S X 3 S X 3は、S X 2に切られるその南にある不定形の土坑であり、これと同様な砂取穴の可能性はある。S X 3南肩の一部はS E 1漆喰除去後黄褐色土上面で検出した。検出面の標高は57.3m、底の標高は56.2mである。底近くしか残存していなかったこともあり出土遺物は少なく、13世紀のものが主体である。

不定形土坑S X 4 S X 4は、D区南辺の黒色土上面で検出された不定形の土坑で、中央を攪乱に切れ、南北に分かれる。底は白砂に達し、砂取穴の可能性はある。南半部分の南肩はA区のS D 1南肩の延長部とはほぼ重なるが、かなり離れており残存部も少ない上、D区東側のA U28区の調査ではこうした溝は検出されていないため、S D 1の延長に関係するかは不明である。南半検出面の標高は57.5m、底の標高は56.3m、北半検出面の標高は56.9m、底の標高は56.5mである。出土遺物は13世紀のものが主体を占める。

このほか、おもにD区北辺では、1辺20cm前後の方形などのピットが検出され、そのいくつかは近世の遺物を含む。D区北辺は、B区と同じく灰褐色土と茶褐色土との判別が困難であり、これらの多くは近世ピットであると思われる。

(3) 灰褐色土を埋土とする遺構 (図版28, 図110)

野壺S E 1 S E 1は、表土・攪乱除去後に検出された漆喰製の野壺である。北側は攪乱に切れ、東壁際では底部がわずかに残る。直径は1.5m位と推定される。漆喰の厚さは数cmで、漆喰上部は破壊されていて本来の深さは不明であるが、残存部の検出面標高は51.7m、底の漆喰上の標高は51.3mである。埋土からは幕末の遺物が出土した。

また、D区南辺の灰褐色土が包含層として残っている部分では、茶褐色土上面で1辺15cm前後の方形ピットが若干、検出された。

(2) 出土遺物 (図115・116)

褐色土出土遺物 (Ⅲ206) Ⅲ206は縄文時代の凹基式石鏃。中央部から先端部にかけて欠損している。肉眼観察では、石材は金山産サヌカイトとみられる。現重量0.8g。

D区の遺構と遺物

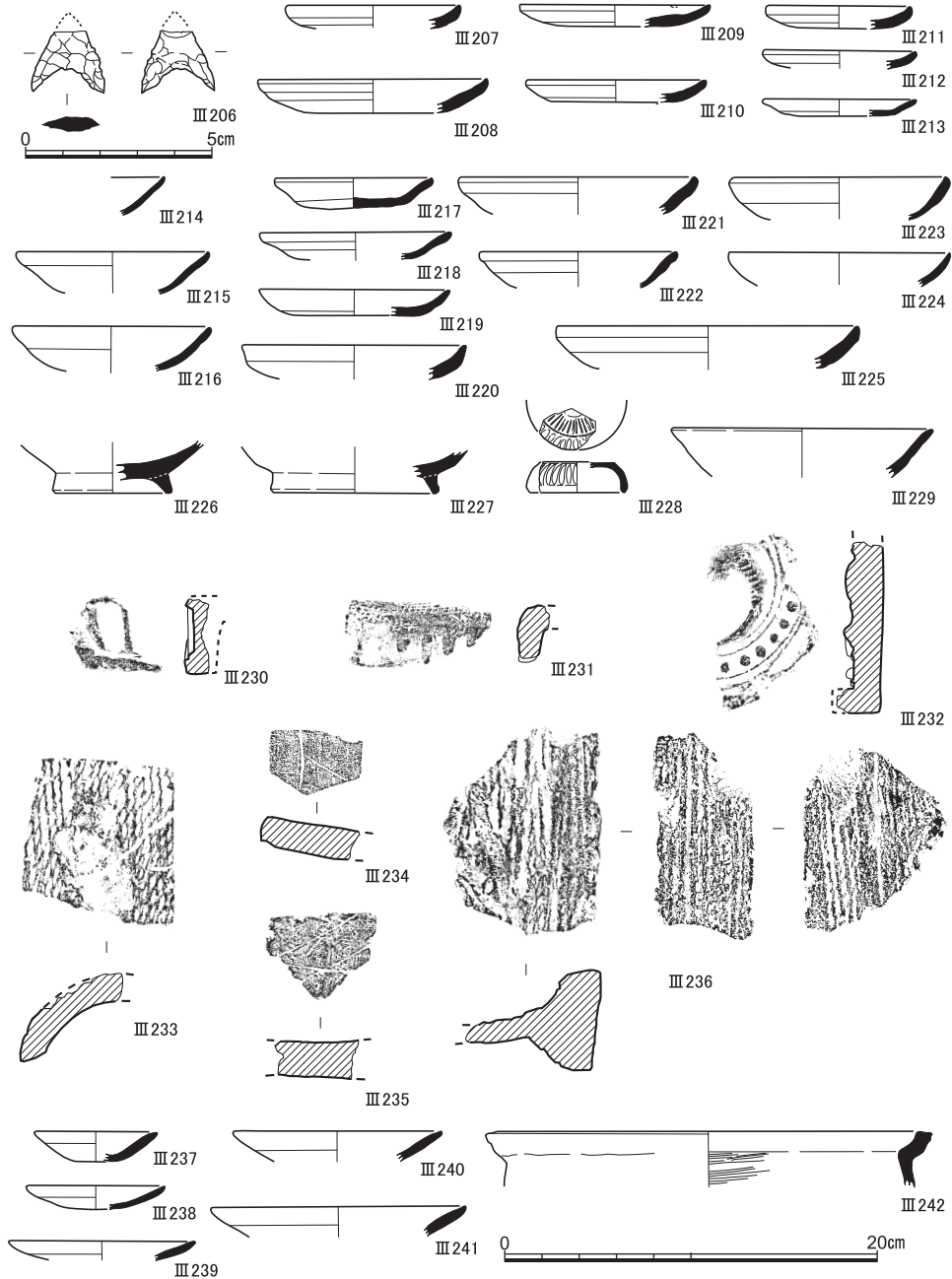


図115 褐色土出土遺物 (III 206石鏃), S K 1 出土遺物 (III 207・III 208土師器), S X 3 出土遺物 (III 209～III 213土師器), S X 4 出土遺物 (III 214～III 216土師器), S X 2 出土遺物 (III 217～III 225土師器, III 226・III 227灰釉系陶器, III 228・III 229白磁, III 230～III 235瓦, III 236埴), 茶褐色土出土遺物 (III 237～III 241土師器, III 242瓦器) III 206: 縮尺1/2

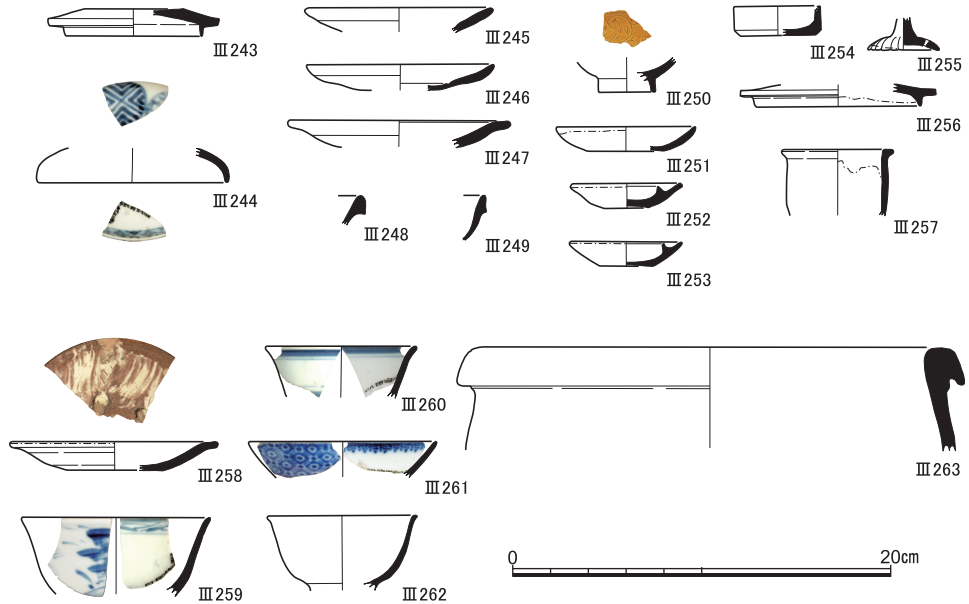


図116 S E 1 出土遺物 (Ⅲ243・Ⅲ244陶器), 灰褐色土出土遺物 (Ⅲ245～Ⅲ249土師器, Ⅲ250・Ⅲ257軟質施釉陶器, Ⅲ251～Ⅲ256・Ⅲ258・Ⅲ263陶器, Ⅲ259～Ⅲ261染付, Ⅲ262白磁)

S K 1 出土遺物 (Ⅲ207・Ⅲ208) Ⅲ207・Ⅲ208は土師器皿で, Ⅲ207はC₃類, Ⅲ208はC₅類。

S X 3 出土遺物 (Ⅲ209～Ⅲ213) Ⅲ209・Ⅲ210は, 口径9.5～10cmの土師器皿D₅類。Ⅲ211～Ⅲ213は口径8cm前後の土師器皿で, Ⅲ211・Ⅲ212はD₅類, Ⅲ213はD₂類。

S X 4 出土遺物(Ⅲ214～Ⅲ216) Ⅲ214～Ⅲ216は灰白色を呈する土師器椀。口径は, Ⅲ215が10.2cm, Ⅲ216が10.5cm。

S X 2 出土遺物 (Ⅲ217～Ⅲ236) Ⅲ217～Ⅲ225は土師器皿で, いずれも1段撫で手法のD類。Ⅲ219が灰白色のほかは橙褐色である。Ⅲ226・Ⅲ227は灰釉陶器の椀。Ⅲ228・Ⅲ229は白磁で, Ⅲ228は合子の蓋, Ⅲ229は椀。

Ⅲ230・Ⅲ231は剣頭文軒平瓦。Ⅲ231は凹面から瓦当面にかけて布目痕が残る。Ⅲ232は巴文軒丸瓦。外区に珠文を施す。Ⅲ233は丸瓦。凸面に縄目叩きの痕跡をもつ。Ⅲ234・Ⅲ235は平瓦で, 凹面に篋記号かとみられる刻線がある。Ⅲ236は磚。直方体で中央部が長方形に凹む。長辺と凹部の一部が残存するのみだが, いずれの面にも縄目叩きの痕跡をもつ。構内各所で出土している類例から, 凹部に2カ所, 円孔をもつ有孔磚である。

茶褐色土出土遺物 (Ⅲ237～Ⅲ242) Ⅲ237は土師器小椀, Ⅲ238～Ⅲ241は土師器皿。

小 結

Ⅲ242は瓦器の鍋。

SE1出土遺物（Ⅲ243・Ⅲ244） Ⅲ243は陶器段重の蓋。Ⅲ244は磁器染付の蓋。

灰褐色土出土遺物（Ⅲ245～Ⅲ263） Ⅲ245～Ⅲ247は土師器皿で、Ⅲ245・Ⅲ246は見込みに圏線がめぐっている。Ⅲ248・Ⅲ249は土師器焙烙。

Ⅲ250・Ⅲ257は軟質施釉陶器。Ⅲ250はミニチュアの椀で、見込みに刻線で文様を描いている。Ⅲ251～Ⅲ256・Ⅲ258・Ⅲ263は陶器。Ⅲ251は灯明皿、Ⅲ252・Ⅲ253は灯明受皿。Ⅲ254は蓋物。口縁端部を無釉とする。Ⅲ255は蓋。白化粧して施釉する。小孔をもつ。Ⅲ256は段重の蓋。Ⅲ258は土瓶の蓋。Ⅲ263は陶器甕。口径25cm。

Ⅲ259～Ⅲ261は磁器染付。Ⅲ259・Ⅲ260は端反りの椀。Ⅲ261はコバルトを用いた型紙摺で明治時代に下る。Ⅲ262は白磁の椀。

7 小 結

本調査で明らかになったおもな成果を以下の3点にまとめる。

①周辺地域の調査同様、調査地点には弥生前期の鍵層である黄色砂は分布せず、微高地部にあたることを追認するとともに、下層に厚く堆積する扇状地堆積物の中に黒褐色～暗褐色の土壤化した堆積物がすべての調査区で存在することを明らかにした。地表面からの深さ2.5～3m前後であり、連続する一連の堆積物と考えられた。

A区では、砂層を重機で除去した後、面的に広げて暗褐色土上面で地形測量をおこなうとともに遺物の有無を確認した。人工遺物は出土しなかったが、炭化材を採集できたので、年代測定を試みた。測定値は 12510 ± 40 BPで縄文時代草創期の年代を示した。

比叡山西南麓一帯で、縄文草創期に属する可能性がある遺物は、本調査区の位置する本部構内で出土した有茎尖頭器2点である〔千葉ほか1997 p.15, 千葉2003 p.87〕。ただし両例ともに、歴史時代の層位から出土していて、本来包含された地層からの出土ではなかった。今回検出した土壤化層は、過去に出土していた当該期の遺物の本来の包含層を推定させる一つの手がかりになるとともに、この時代の人間活動を追究するデータともなるであろう。

また本調査区の北、約200mに位置する397地点の調査では、アカホヤ火山灰（7300年前）を含む土壤化層が検出されている〔笹川ほか2015〕。この土壤化層からは遺物は出土しなかったが、さらに下層に堆積する土壤化層から縄文土器の細片が1点出土している。縄文時代の前半期にさかのぼる遺構・遺物について、十分留意しつつ調査を進める必要を示し

ている。

②A区でみつかった南北に伸びる中世の道路は、75・89地点で検出された道路状遺構S F 3の北延長上にあたる。この道路を切るかたちで、南北方向に伸びる溝、東西方向に伸びる溝もみつかった。溝は、いずれも断面逆台形で、幅2.5m前後、深さ1 m前後。東西溝が南北溝を切っているが、出土遺物からは明瞭な時期差をみることはできない。土地の区画を示す溝と思われ、土地利用の様相を知る重要な情報となった。

③白色の砂を採取した砂取穴がC区・D区ではみつかったものの、A区・B区には認められなかった。掘削面や埋土に含まれている遺物から、中世後半のものとする。本調査区周辺での砂取穴は、75・89地点の西辺、214地点の北端では確認されているものの、124地点、219地点、262地点にはみられない。大規模に展開していたというよりも、モザイク状に分布していた可能性が高い。

本章は、第1節・第2節・第3節(1)・(4)・第6節・第7節を千葉豊、第4節(3)・第5節(4)を笹川尚紀、第3節(2)・(3)、第4節(1)・(2)、第5節(1)～(3)を長尾玲が分担執筆し、千葉が全体を調整した。現地調査と整理作業は、千葉豊と笹川尚紀が担当し、長尾玲・磯谷敦子・柰佐和子・上阪航・高野紗奈江が測量や出土資料の実測・復元などをおこなった。